

I 研究の概要

1 研究主題

深く思考する「学び」を児童と共に醸成する

～ 算数科における対話型授業の創造 ～

2 主題・副題の設定の理由

(1) 本校の現状と求める子ども像・教育像

本年度の校長ビジョンのスローガンは、「自分から、みんなで、学びを楽しむ」である。

これは、昨年度の「自ら問いをもち、思考し表現する児童の育成」において算数科に焦点を合わせた研究実践の中で、教師自身の「教師主導で進める意識の強さ」と、「子ども一人ひとりがノートに向かい、答えを導くということへの意欲は見られるが、吟味し深めようとする姿が希薄である」という本校の課題が明らかになった背景からである。

合わせて、OECD が描く Education 2030 のプロジェクト (1) や野原 (2) が示すエージェンシーの育成、並びに佐藤 (3) が示す第4次産業革命時代、そしてグローバルゼーションの中における教育の質的転換を鑑みると、本校における課題は「正解を出す」学びよりも、自分たちなりの「解を生み出す」学びに、『子どもと教師が共に向かうこと』といえる。具体的な子どもの様子でいうと、「子ども自身が他者とかわる中で自らの問いをもち、多様さの中で揺れ動きながらも決して折れずに学び続け、自分たちの解を模索し、探求をし続ける」という児童の姿であり、そのプロセスにおける学びを意図的に展開する教師の姿に現れるといえる。このような栗生小学校の現状、そして、求められる教育観の転換を視野に「自分から」「みんなで」「学びを楽しむ」の共有を4月より教員間でなされており、本年度の研究の視点においても、この考え方を踏襲して進めることとする。

(2) 対話の効果的価値

この「自分から」「みんなで」「学びを楽しむ」ための教育において、本研究では対話に着目した。多田 (4) は対話を『目的をもった話し合い』とし、そこでの大切なこととして、『自分の考えをもち、表現すること』『人の意見を聴き、それを受け止めること』『しなやかに自分の考え方を変化させる柔軟さをもつこと』と述べている。さらに、生来、人は学ぶことを楽しむものであると考える。佐藤 (5) は学びを『三つの次元の対話的实践』と定義し、『学びは世界づくりと仲間づくりと自分づくりを三位一体で追求する対話的实践』としている。つまり、対話無くして学びとはならない。その学びの中で、目標を達成する中での自分自身の変容を自覚したり、できたこと（プロダクト）やできるように努力した自分（プロセス）への効力感を得たりすることは格別の喜びとなると考える。他にも、他者が自分と真剣にかかわり、協働して成し得ることや、自分でも知らなかった自分の一面を発見し、承認し、そして分かち合えることなど、語りつくせない楽しみが、学びにはあふれている。このように考えると、子どもが学ぼうとすることが大切であり、教師主導で「学ばされる」学習では、児童が学びを楽しみ、楽しみのもと学びを求めることは難しいと考える。

故に、対話型授業を目指すことは、子どもが「自分から」「みんなで」「学びを楽しむ」ことを可能とすることを示し、かつ、我々教師がもつ「教師主導の意識の強さ」への意識の変革や統合を伴う教員自身の学びとなると考えた。

（３）長期的な対話実践への展望と直近の課題としての対話的空間の形成

対話的授業を構想する上で多田（４）の『対話力の状況』を活用する。（下表参照）

対話のステージ	学習者の状況
ステージ 1	対話に参加する意識が希薄で、自分の考えが持てず、また、語るに足る体験や考えをもっていることに気づかず、傍観者的な態度の子どもたちが多い。
ステージ 2	発言力のある子が数多く発言してはいるが、自分本位で、競争意識が希薄である。他方、自分の考えを持ちはじめたが、伝える自信がなく、自己表現しない子たちもいる。
ステージ 3	自分の伝えたいことを伝え、相手の伝えたいことを聴き取り、対話できる。しかし一定の結論が出ると、とどまってしまう。ときには少数者の切り捨てや、結論を急ぐ集団浅慮が起きてしまう。
ステージ 4	参加者が主体的に参加し、需要的雰囲気の中で内省的な探究をし、また、さまざまな意見・感覚・体験が出され、論議が広がっていくが、意見や感想が絡み合わず、深まってはいかない。
ステージ 5	参加者全員が当事者意識・共創意識を持ち、多様な見解・対立などのズレを生かし、様々な見解や感想を分類・整理しつつ、解や智慧を共創していく。さらに、新たな問いを発見し、次々と知的世界を探究していく。

対話型授業として、ステージ 5 に示される学習者の状況を目指すことになるが、本校の実際においては、ステージ 1～4 の状況、とりわけ 1～3 の状況の子どもが多く見られる。これらは学びへの姿勢・態度とも大きく関与しており、涵養していくに値する内容といえる。これらの対話力の形成に関し、多田を講師に研修会を行う中、日々の学校生活を基軸とした「対話を要する子ども同士の関わり合い」の重要性が共有されてきた。

また、対話的授業の展開に際しては、目的的な活動となる目標や教材の工夫、子どもの動機を基軸とした学びが起動していく授業デザイン、考えを互いに知る、語るためのツールや人数などの学習環境、及び、対話を繰り返す空間などへの配慮や工夫、教師の促進者としての役割や共創していこうとする態度など、意識できること、いわば、「対話に必要な授業の構成要素」は多岐に渡る。本校教員は若い教員も多く、一人ひとりの教育観や課題意識は多様といえる。そんな中、授業実践、研究実践において同じ行動を目的としては、前述の子ども同様、「学ばされる」の一言に尽きる。故に、自らの課題を自覚してすすめる研究を為していくこととする。

ここまですまえ、本研究に際して、これら教員、子どもの現状から、ステージ 5 を目標とした本校に即した「対話に必要な授業の構成要素」の運用・開発を長期的に視野に入れつつ、日々の対話を促し、対話の素地を成す「対話力が発揮されるスキル（態度）」の醸成を目指すこととした。これを受け、下記のように研究仮説を設定するとともに、主題、副題が設定された。

【研究仮説 1】対話型授業実践を目指して

教員が対話型授業を目指す価値を共有し、対話に必要な授業の構成要素を意識したり開発・工夫したりすることで、教師主導の意識が変容し、子どもが主体となり、深く思考する学習環境のデザインが可能となる。

【研究仮説 2】対話的空間の形成を目指して

子どもが対話のスキルを習得し、日々の学習で他者と多様に関わり合う関係性や価値を醸成することで、深い思考を伴う学びが可能となる。

3 全体構想

本校児童、教員の実態と近未来に求められる力や社会性、及び社会背景

校長ビジョンのスローガン

「自分で」「みんなで」「学びを楽しむ」

研究主題

深く思考する「学び」を児童と共に醸成する

～ 算数科における対話型授業の創造 ～

研究仮説①

教員が対話型授業を目指す価値を共有し、対話に必要な授業の構成要素を意識したり開発・工夫したりすることで、教師主導の意識が変容し、子どもが主体となり、深く思考する学習環境のデザインが可能となる。

研究仮説②

子どもが対話のスキルを習得し、日々の学習で他者と多様に関わり合う関係性や価値を醸成することで、深い思考を伴う学びが可能となる。

【仮説①の具体的方略】

- ・対話型授業の研修、自己研鑽、研究授業及び討議を通して、対話の必要性や価値を教員が体得していく。
- ・対話型授業の実践に試み、共有していく。且つ、創造的に対話を意識した授業に取り組む。

【仮説②の具体的方略】

- ・子どもが他者との対話（語る・聴く）に慣れ親しむことのできる場のデザインをする。
- ・対話を成す中での知識、スキル、思考の深まり、学びに向かう態度などへの価値づけを教師や子ども間で行う。

【仮説①の具体的方略のための型の例】

- ・目的的な活動となる発問、課題、教材などの工夫
- ・子どもの動機や素朴概念を基軸とした学びが起動する授業デザイン
- ・考えが見え、語ることのできるツール、人数、空間などへの配慮や工夫
- ・教師の促進者としての役割や共創している意識、態度 など

【仮説②の具体的方略のための型の例】

- ・ペアやグループによる安心して互いに聴く、語ることのできる活動の設定
- ・「話してよかった」となる題材や話題といった内容への教師の配慮
- ・互いの違いを楽しむ場の設定や、教師が率先して楽しむ姿勢
- ・価値づけるための可視化のデザイン
- ・話したいを叶えるお散歩タイム など

具体的には、この研究を通して、子どもの中の学ぶことの意義を高め、子どもの学び方をかえることをめざす。すなわち、教員の意識の転換と共に、自分たちなりの「解を生み出す」学びに子どもと教師が共に向かい、「子ども自身が他者とかかわる中で自らの問いをもち、多様さの中で揺れ動きながらも決して折れずに学び続け、自分たちの解を模索し、探求をし続ける」姿が現れる粟生小学校に期待する。

4 研究内容

(1) 授業研究

本年度は仮説②による対話のスキルや価値の醸成を日々の授業で行う。これらの対話スキルの獲得、または涵養を念頭に、研究授業では、算数科の学習を通して、仮説①による対話型授業の創造に取り組む。

(2) 授業研究の視点（研究の重点）

視点 1 子ども自身が他者とのかかわる中で自らの問いをもてたか

視点 2 多様さの中で揺れ動きながらも決して折れずに学び続けようとしているか

視点 3 自分たちの解を模索し、探求をし続けているか

(3) 検証の方法

- ・授業参観シートでの評価，授業整理会での意見交流
- ・授業の中での児童の姿・行動（観察・ノート・成果物）
- ・児童・教員に向けたアンケートでの意識調査

(4) 他の部会との関連事項

学習支援部

① 必要に応じた学習ツールの活用

- ・ノートやタブレット端末による学習の足跡のポートフォリオ化の共通理解・共通実践
- ・学年や教科に応じたノートの書き方・使い方指導
- ・自分の考えを表現する活動と効果的なフィードバック

② あおっこタイム・チャレンジタイムの充実

- ・基礎基本の定着，活用力，表現力の育成
- ・新たな単元に入る前のレディネスの確認（AIドリルの活用）
- ・能美っ子チャレンジプリントや評価問題の活用

③ 学習の環境づくり

- ・学習に向かうための落ち着いた環境づくり，学習環境の整備
- ・学びの跡が見え，児童が既習を活用できる学習掲示の作成

生徒指導部

あたたかい学習集団づくり

- ・よりよい集団をめざした目的的な学級集団づくり
- ・生徒指導の4つの視点を意識した指導の工夫